

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

ションヤンの酒家 (みせ) (生活秀)

2002年・中国映画・106分
配給/日本ヘラルド映画

2004 (平成16) 年3月12日鑑賞
<OS劇場C・A・P>

Data

監督：霍建起 (フォ・ジェンチイ)
原作：池莉 (チ・リ)
出演：陶紅/陶澤如/潘粵明/張世
宏/吳瑞雪/李嘯塵/楊易
/羅德遠/劉珉/蔣名笑/
鄭梅竹

👁️👁️ みどころ

重慶の旧市街にある吉慶街で屋台を営む美しい女性ションヤン (陶紅：タオ・ホン)。人気メニューは「鴨の首」。近代化・都市化の嵐が押し寄せる中、ここも近い将来立退きらしい。ションヤンは多くの兄弟問題や財産問題を抱えながらも、力強く店を切り盛り。しかし自分の男問題では・・・？『山の郵便配達』(98年)で美しい自然と父子の愛情を瑞々しく描いた霍建起 (フォ・ジェンチイ) 監督が、一転して、現代中国の「都会」を舞台に力強く生きるヒロインを多方面からイキイキと描いた魅力的な作品。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<観客数は約20名だが・・・>

金曜の晩6時45分の上映。試写室 (会) の予定がいっぱいつまっている中、私は久しぶりに1800円の正規料金を払って梅田の繁華街にあるOS劇場C・A・Pまで自転車で駆けつけた。

きれいで大きな劇場だが、観客数は約20名。予想どおり中年ばかりだが、目につくのは、1人で来ている人が結構多いこと。やはり大宣伝していないこの手のマイナーな映画を観にくるのはかなりマニアックな人が多いのだろう。この程度の人数なら、映画終了後、観客が集まって感想会でもやれば面白いと思うのだが・・・。

<重慶というまち>

重慶は日中戦争時代、蒋介石率いる国民党政府の臨時首都とされた都市。また、中国共産党も、ここを拠点としたため、毛沢東と周恩来が国民党幹部と会談した紅岩村の革命記念館などが有名。

また重慶は長江と嘉陵江に挟まれた東西5キロメートルの丘陵地帯に、煉瓦造りの家屋や高層ビルが立ち並ぶ人口1470万人という中国最大級の大都市。長江や嘉陵江を渡るのはロープウェイで、この映画にも数回登場する。どこかで見た風景だと思ったら、この重慶というまちは、あの『たまゆらの女（ひと）』（02年）の舞台となったまちだ。これは昆明に住む白磁器の染付け絵師であるコン・リーと重慶に住む恋人の詩人とを結ぶ遠距離恋愛を描いた名作。だからこの重慶の「ロープウェイ」や高層ビルの景色はあの『たまゆらの女（ひと）』で観た風景と当然同じ。

もともと四川省の省都は重慶ではなく、三国志で有名な成都。そして重慶から船に乗って長江（揚子江）を下る山峡クルーズは、ツアー旅行としても有名。重慶～荊沙市と重慶～武漢の2つのコースがあるが、それぞれ2泊3日、3泊4日という大層なもの。しかし、近いうちに、是非行ってみたいと思っている観光地だ。

<都会に生きるヒロイン>

『ジョンヤンの酒家』とは、この映画のヒロイン、ジョンヤンが経営する屋台のこと。ジョンヤンの店（屋台）は、重慶の旧市街、吉慶街にある（とはいっても、地図上、具体的にどこにあるのかは私自身はわからないので、重慶旅行をした後、あらためてその見聞記を書きたい）。そして、その店の名物は「鴨の首」（これも、パンフレットには詳細な説明があるが、何せ食べたことがないので、よくわからない。しかしこれも是非一度食べてみたいもの）。

この映画の中国タイトルは『生活秀』、そして英語タイトルは『LIFE SHOW』。つまり「私の生きざまを示しましょう」という意味で、重慶という大都会の吉慶街で屋台を切り盛りしているヒロイン、ジョンヤンの生きざまを示すことがこの映画のテーマ。

この映画の監督は日本でも大ヒットした『山の郵便配達』（98年）の霍建起（フォ・ジエンチイ）監督。『山の郵便配達』は大自然の美しさとその険しい山の中で黙々と郵便物を配達する父親とその息子との絆を淡々と描いた感動作。中国の辺境部や山間部では、この映画に描かれたような美しい自然と静かで強い人間関係が残っているが、都会ではそうはいかない。だから都会でのヒロインの生き方に焦点を当てたこの映画では、このヒロインは否応なくさまざまな人間関係に巻き込まれ、その生き方をさぐっていくことになる。

<興味深いパンフレットの「解説」>

パンフレットには、次の4本の解説がおさめられている。すなわち

Aー谷村志穂（作家） 「強い女」

Bー中村アキコ（エディター） 「同じ女だからこそわかる、女の人のための映画」

Cーきさらぎ尚（映画評論家） 「トレンドは、元気があって、努力を惜しまないグッ

ド・ガール」

D一ほしのあきら（多摩美術大学教授、映像作家） 「女優、大きなまなざし、影、の映画」

AとBは女の視点からの解説で、それぞれ自分の立場や生き方と対比しての解説だから興味深い。とりわけ面白いのがBで、これは中国女と日本男のケースはダメ、中国男と日本女のケースはオーケー、と分析しながら、「中国女の強さ」を解説している。

CとDは男の視点でわりと理屈っぽいけど、それなりに面白い解説。ただ、Dが久しぶりの「女優の映画」として、「緋牡丹のお竜さん」とジョンヤンが繋がったというのは、ちょっと違和感がある。もっとも解説者自身が、「私の中で勝手に」と断っているのだから、それは確かに人それぞれの勝手……。

また、Dが、ジョンヤンと卓氏とのセックスシーンについて、「メロドラマのような甘美な流れとはほど遠い、ガツガツした中年の情けなさが秀逸！」と表現したのは、さすが男性の映像作家だと妙に「感心!」。なお、パンフレットには載っていないが、「OS CAP LINE UP」というチラシに掲載されている、シネマコミュニケーションの森川みどりさんのシネマトークもさすがに面白いもの。

この映画が描くヒロインの生き方を考えるについては、このようないろいろな立場の人の意見を聞いて、ディスカッションすれば、いろいろな視点が見えて、より考え方が深まり、面白いと思うのだが……。

<ヒロインの生い立ちと境遇は?>

ジョンヤン（陶紅／タオ・ホン）は確かに美人だが、その反面強くてたくましい!それにひきかえ、ジョンヤンの周りの男たちは何とひ弱いことか……。

ジョンヤンは3人兄弟のまん中。兄（張世宏／チャン・シーホン）は結婚して10歳の長男トアル（李嘯塵／リー・ショウチェン）がいる。しかし兄嫁（呉瑞雪／ウー・ルイシュエ）は派手好きで株取引に夢中。だから平気でトアルをジョンヤンに預けたり……。

一方、弟のジュウジュウ（潘粵明／パン・ユエミン）は、ミュージシャン志望だが、あまり生活力はないようで、薬物中毒となり、今は、更生施設に入っている。

また、ジョンヤンは幼い頃に母と死別したが、父親は、京劇の女優に熱をあげて家を出ていった。今は再婚しているが、子供たちは義母が嫌いだから父の元へ寄りつかず、音信不通の状態。こんな境遇だったため、弟のジュウジュウはジョンヤンが姉というよりも母親がわりで育てていた。さらに、兄の息子トアルには、ジョンヤンが自分のお乳を飲ませたことも。ということは、つまり、ジョンヤンも懂っていた大学生と結婚し、妊娠しながらも流産した経験があるということ。

ジョンヤンの強さと行動力は、自然にスクリーンからいっぱい見えてくるが、ジョンヤンの弱さは、店に通いつめている中年男、卓氏との語らいの中ではじめてわかる。ああ、

こんなに元気で強いションヤンにも、「なるほど、こんな過去があったんだ、こんな弱みがあるんだ」ということが、そこではじめてわかり、なぜかホッとする。なぜなら、強いだけの女ではあまり魅力がないから。

<ションヤンの強さとしたたかさ>

しかしションヤンは強い。そしてまた「したたか!」。その強さは、まず第1に、下ごしらえから料理づくりそして客あしらいから後片付けなど、重労働となる屋台の切り盛りをすべてきっちりとこなしていることにあらわれている。

そして次は、①兄弟夫婦の長男トアルの世話、②施設にいる実の弟ジュウジュウの面会とその世話、など身内の弱い男たちのお世話。さらにションヤンは、③自分の店で働いている、田舎出身の美しい娘アメイ（楊易/ヤン・イー）の世話までも。

他方、したたかさがモロに出るのは、①店の売りモノは「鴨の首」だが、それを売るためには自分の美しさや女の魅力も必要だとわかっているため、化粧を欠かさず、それとなく自分の魅力を振りまくというしたたかさ、②文革のどさくさで借家人に奪われてしまった父親の家の名義を取り戻すため、住宅管理所の所長へ陳情（交渉）する時の、色仕掛けめいたことまで平気でやるしたたかさ、③弟ジュウジュウとの失恋で傷ついたアメイを、所長の息子と結婚させて、ポイントをあげるというしたたかさ、④家を取り戻すため、音信不通となっていた義理の母親にうまく取り入って、父親もろとも手なづけてしまい、家の名義を移す協力をさせるしたたかさ、などさまざまだ。

<ションヤンの弱さは?>

1年間ずっと店に通い、鴨の首を食べながらじっとションヤンを見ている客が卓氏。中年オヤジだが、羽振りはよさそう。ションヤンに好意を示し、何とか「モノにしたい」ために毎日店に通ってきていることは明らか。そしてそれは、そろそろ屋台の別の店でも噂になりかけているほど。

しかしションヤンは、店の客以上の特別な興味は示さない。言われたとおり料理を出し、おみやげを入れ、お金をもらうだけ。ところがある時、見つめられていることがわかっているションヤンは、笑顔を卓に返した。嬉しそうな卓。今日はそれっきりだが、これが第1レベル。

第2レベルは、ある日、卓のテーブルの前にションヤンが立った時。卓は「まあ、座ってビールでも・・・」と、ションヤンに勧め、「でも、酌はしないわよ」と言いながらテーブルに座ったションヤンは、自分の過去を語り始めた。すると卓も自分の過去を・・・。この話し合いの中でお互い離婚を経験した立場であることや、卓は開発関係の仕事をしてかなりの収入を得ていることがわかったわけだ。

次の第3レベルの接触は、家まで送っていく途中の2人だけのちょっとしたデート。こ

こまでくるとあとは……。卓がずっと好意を持ち続けて店に来ていることがわかってい
るのだから、シヨンヤンが卓の気持を受け入れる姿勢を示しさえすれば……。そうなれ
ば一挙に第4レベルだ。

女がそんな第4レベルの気持になるのはどんな時か？もちろん男の私にはそれはわから
ないが、想像がつくのは、自分が悩みを抱えて、頭打ちになり、誰か頼れる人（男）がい
ないか、とつい思う時。この人なら、すべてを任せれば、自分を救ってくれると思う時だ
ろう。これほど強いシヨンヤンだって、やはり女は女。店に兄と一緒にやって来た兄嫁と、
父親名義だった家のことで大ゲンカし、ハデな立ち回りをやって深く傷ついたシヨンヤ
ンは、これを優しく慰め、「場所をかえて飲みに行かないか？」と誘う卓に対して、「今日は
ダメ。しかし今度の土曜に遠出しよう」と誘った。もちろん卓は即オーケー。心の中では
「ヤッター！」と叫んでいたはずだ。

シヨンヤンがこのように誘ったのは、「ここまで頑張ってきたのだから、そろそろ自分の
幸せを願ってもいい頃かな」と自分の限界を感じ、男に頼ろうとしたため（らしい）。する
と果たして第5レベルはどうなるのか？

<男と女の行き違い！>

卓が運転する車で、2人が「遠出」したのは、場所は把握できないが、郊外の山の上
にある美しいホテル。もちろんここまで出かけてくるについては、シヨンヤンもその後の展
開（すなわち2人の間での初のセックス）を覚悟し、それなりの準備をし、かつその後の
展開や夢もいろいろ描いていたはず。第3レベルの時は、やんわりとキスを迫り抱擁して
きた卓を、「ウブな娘じゃないんだから」と言って拒否し、さらに「兄の子供がいるから」
と言って、部屋に入れることも拒否したシヨンヤンも、このいわば第5レベルでは、当然
「セックスオーケー」と考えていたはず。そして、ベランダから美しい景色を観ながらの
楽しい語りを経て（そこに急に雨が降り出したのは、早く部屋の中に入って、コトにお
よべ！という天の声かも……）部屋の中へ。そこで前述した、ほしのあきら氏の解説（D）
のように、「メロドラマのような甘美な流れとはほど遠い、ガツガツした中年の情けないセ
ックス」が展開されたわけだ（その場面はほんの少しだけだが）。それでもシヨンヤンは幸
せだったに違いない。そして、1つのベッドの上で目覚めた翌朝。疲れて眠っている卓に
対して、いとおしそうに手をかけ、胸に顔をうずめるシヨンヤンを見ていると、やっぱり
女は女だな、と私などは思ってしまう。

しかし、そのベッドの中で、「私たちこれからどうなるの？」と尋ねたのはシヨンヤン。
よくあるパターンだ。しかし、それから交わされる2人の会話は最悪！2人のすれ違い、
男と女の思惑のズレをはっきりと露呈させた。すなわち、卓いわく、「結婚なんかしない。
愛人で十分だろう。会いたい時はこのホテルにくればいい」。さらに「結婚にこだわるなん
て、君も意外と古い女だね」。そして帰りの車の中や、どしゃぶりの雨の中での卓の発言は、

「店なんかやめりゃいい。面倒は僕がちゃんとみるよ」、「僕は本当に君が好きなんだ」というもの。しかし、この一連の卓の言葉や考え方に、プツンしたのはシヨンヤン。そこでシヨンヤンが取るべき行動はただ1つ。自ら別れを切り出すこと。そしてシヨンヤンはそのとおりの行動をとった。前述のパンフレットの解説A、B、Cは、この彼女の取った行動を当然の決断としているが・・・。

<卓は悪い？それとも悪くない？>

卓は都市開発の仕事をやっている様子。近代化が進む中国では、土地を動かすことによって儲けている人種は増えているはず。だから、「屋台を経営して安い利益で働くより、楽をして大きく稼ぐ仕事の方がいいのでは・・・」と考えるのは当然だし、これを勧めたのはシヨンヤンへの愛情から出た言葉。そして、屋台へ通いはじめた動機が、いわば「市場リサーチ」だったとしても、シヨンヤンの魅力に惹かれてその店に毎日来ていたことは確か。そしてシヨンヤンを好きになり、何とか「モノにしたい」と思っていたことも確か。

卓と同じ中年男の私が考えれば、これは必ずしも悪いことではないし、卓に誠意がないとも思わない。しかしさて皆さんはどう考えるのだろうか？私に言わせれば、2人のすれ違いの原因はただ1点、結婚を希望しているか、それとも希望していないかということだけ。後から考えれば、シヨンヤンはまずこの点を卓に確認しておくべきだったのかもしれない。しかし、結婚するのなら付き合うけれども、結婚する気がないのなら付き合わないというのも、一度離婚して1人で強く生きている女としてはちょっと古いように私も思うのだが・・・。ひょっとして、そのように思う私も悪い中年男なのかも・・・？

<不可解な家の名義変更>

シヨンヤンは、借家人名義にされてしまった父親の家の名義変更のために住宅管理所へ通い、その所長に再三頼み込んだ。それも、ちょっとオシャレをして、笑顔をみせながら、流し目で、所長の近くにすり寄りながら・・・。

ある時、所長が息子を連れて屋台にやってきた。それを見たシヨンヤンは、愛想よくご挨拶をしたが、この時息子はアメイに一目惚れした様子。経験豊かな人生を歩んできたシヨンヤンは、これを瞬時に見抜き、アメイにこの息子との結婚を勧めた。

中国では、田舎から都会に戸籍を移すのは至難のワザ。しかし結婚すればそれは可能だし、きっと所長たちはアメイを優しく可愛がってくれるはず。そうすれば出来の悪い弟ジュウジュウに惚れて、いつまでもクヨクヨしているよりは、よほどアメイにとって幸せ、と思ったことは確か。

しかし反面、アメイが所長の息子の家に嫁入りすれば、所長は、あの家のことを何とかしてくれるだろうと計算を働かしたことも確か。現に、この後、借家人名義となっていた家の名義変更は「簡単に」完了し、そのうえ所長から「シヨンヤンからはあまり立退きを

催促しないように。私の方から借家人に言うておくので」というありがたいお言葉まで。こうなると弁護士としての、「人治国家」から「法治国家」への移行を目指しているはずの中国の登記制度は一体どうなっているの?と云いたくなってしまふ。

<全人代と憲法改正>

日本の国会に相当する中国の第10期「全国人民代表大会」(全人代)が、2004年3月、北京で開催された。それまでは憲法上「国は公民の合法的な所得、蓄財、住宅およびその他の合法的な財産の所有権を保護する」としか規定されていなかった私有財産について、①公民の合法的な私有財産権の不可侵をはじめ明記し、②土地収用に対する補償を規定するように憲法が改正された。ションヤンの屋台の立退きが始まったことについて、日本語字幕では、「今回は区画整理ではなく、宅地にするための立退き」と出ていたし、パンフレットの解説では、再開発と書いてある。これは多分、日本語字幕を担当した古田由紀子氏も、物語解説を書いた人も、中国の土地法や都市政策を何も知らないからだろう。日本の都市計画法や土地区画整理法、都市再開発法、土地収用法などの各法律は複雑。そして全部で約200本もある日本の都市法制を把握している人などごくわずかしかない。まして中国の土地法や都市法はほとんどの人が知らないのが当然。そのために映画ではこのような不正確な言葉が飛び交うことになるわけだ。北京では、2008年のオリンピック開催に向けて強制立退きをめぐるトラブルが深刻化し、それは今や「土地戦争」といわれている。2003年11月12日読売新聞で、「天安門前で、ガソリンをかぶって抗議の焼身自殺を図る者まででた」と報道されたが、これが現実の中国の姿だ。

<霍建起監督以下のスタッフは?>

霍建起監督は、私が2003年11月1日~4日に北京旅行に行った際、わざわざ立ち寄って見学した北京電影学院出身の監督。そして日本でも有名な張藝謀(チャン・イーモウ)監督や陳凱歌(チェン・カイコー)監督と同期。しかし、パンフレットによると、「商売のことは他の人に任せて自分はいい作品を作るのみ」と堂々とやっているのはすごい。霍建起監督を有名にした『山の郵便配達』とこの映画が共通しているのは静かな音楽。音楽はあくまでスクリーンに観客の目を集中させるための道具と考え、一歩引いている感じが同じ感覚だ。音楽担当は、『山の郵便配達』と同じ王小鋒(ワン・ショウフン)。そして録音担当も北京電影学院卒の晁君(ツオ・ジュン)。やはり映画人養成の専門大学が存在している役割は大きいものがあると思う。

<ヒロインを演ずる陶紅の魅力は?>

私はこの映画のヒロインのションヤンを演ずる陶紅(タオ・ホン)をこの映画ではじめて観た。彼女は多数のテレビドラマや新劇などで活躍し、歌手でもあるらしい。そして彼

女は、この映画で2002年上海国際映画祭で主演女優賞、金鷄賞で主演女優賞を受賞した、とのこと。しかしパンフレットには生年月日は書いていない。ということはあまり若くない・・・？ものすごい美人ではないが、目の大きなハデな顔で、かなりの美人。そしてその表情の豊かさには驚かされる。もっとも、重慶出身だから、私の大好きな鞏俐（コン・リー）と同じく、中国では演劇関係の最高学府で、最難関の専門大学である北京中央戯劇学院の出身。今後どんな作品に起用されるか楽しみだ。

なお、この映画ではずっとタバコが小道具として活躍する。すなわち、屋台で座っているションヤンのタバコに火をつけるという1つの行為が、男と女を結びつける最初の儀式となっている。ションヤンはしたたかな計算のうえに、それを待っているわけだ。映画のラストシーンは、卓と別れたションヤンが、また屋台に座っているシーン。そのションヤンが持つタバコに火をつけたのは、今度はちょっと若い絵描きの男。「絵を書いてもいいですか？」と言われ、これをオーケーしたションヤンは、いつしかこの絵のモデルになって一時を・・・。そして男は「明日も来ていいですか？」と。じつといつもの屋台のイスに座るションヤンは、こんな形で重慶の吉慶街の屋台で今後も力強く生きていくのだろう！

2004（平成16）年3月13日記